

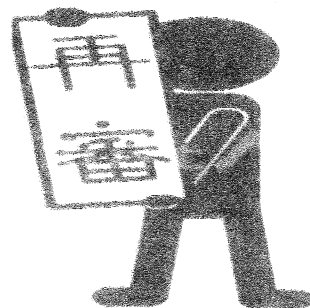
2025年6月21日

人権ネットワーク八幡 NEWS

事務局 〒523-0857 近江八幡市八幡町170(旧八幡教育集会所内)
電話 【携帯】 080-2525-7114(高坂)
【メール】 Tko_koj1224@yahoo.co.jp

埼玉県狭山市 石川早智子さんからのお願い ～狭山事件、第4次再審へ～

ありがとうございます
お手紙、ニュースレター届きました。
ご心配かけ すみません
これから第4次再審が始まります。
今後ともよろしくお願いします。



2025年4月26日 「天声人語」(朝日新聞)より

しみりとした歌声が響いていた。〈吹けば飛ぶよな 将棋の駒に〉。「王将」の演歌の調べである。〈かけた命を 笑わば笑え〉。マイクを握った男性の顔には深いしわが幾重にも刻まれている。友人たちとの会食の席だろうか。

この3月に届いた訃報だった。狭山事件で強盗殺人罪に問われ、無実を訴え続けていた石川一雄さんが亡くなった。86歳だった。先週、東京・神保町駅の近くで開かれた追悼集会に行くと、在りし日の故人の日常を映した動画が流れていた。

石川さんは叫んでいる「不撓不屈(ぶとうふくつ)。こんなもんには負けてたまるか」。書きためてきた短歌も、妻の早智子さんから紹介された。〈晴れる日は今日か明日かと60年 何時(いつ)も心中露時雨(つゆしぐれ)〉。無念さを塊にしたような言葉がいくつも続く。

ひどい貧困の問題があった。権力の横暴があった。教育を受けられなかった者への残酷な冷たさがあった。そして、それらの根源が、被差別部落に対する人権侵害の問題ではなかったか。獄中生活は31年に及んだ。

3回目の再審請求が出されたのは2006年だ。19年もの年月が過ぎるのに、裁判所は何ら判断を示していない。あまりにも長すぎる。冤罪を訴える人間に対し、いまのこの仕組みは、不条理である。

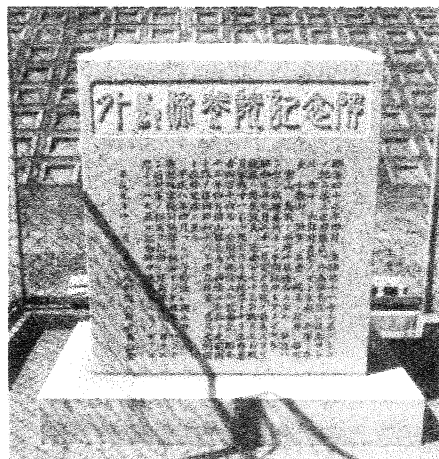
追悼会場には、フォーク歌手の小室等さんも駆けつけ、ギターを手に歌った。〈どこかで だれかが/きっと待っていてくれる〉。懐かしいにおいのする曲だった。〈雲は焼け 道は乾き/陽はいつまでも沈まない〉。

大阪にあったハンセン病療養所

大阪市と尼崎市のちょうど境(大阪市西淀川区中島)の埋め立て地に「外島(そとじま)保養院記念碑」がひっそり建っている。現在は、大きな工場が立ち並んだ工業地帯で、そこがハンセン病療養所の跡地であることは、ほとんど知られていない(たぶん)。1909年(明治42)4月「癩予防二関スル件」施行によりこの地に外島保養院が開設された。その後官民一体での「無癩県運動」や「昭和天皇即位式」に合わせた一斉取り締まりの強化などにより、定員をはるかに超える患者が強制収容され移転案が浮上するが、移転先自治体住民による猛烈な反対運動が起き、やむを得ず現地拡張を選択した。近隣住民による拡張反対・移転促進運動も活発化するが…。拡張工事の途中、1934年(昭和9)9月の室戸台風により壊滅的な被害を受け、入居者・職員あわせて196人が犠牲となった。

生存した400人余りは、全国各地の療養所へバラバラに送られ、1938年6月、長島愛生園の隣に新しく建設された邑久光明園に帰園した。滋賀県のハンセン病患者もこの歴史をたどっていることになる。邑久光明園滋賀県人会の入所者(けっこう憂快なオジサン)に毎年話を聞きに行っていたが…こんな歴史は知らなかったな。

(清原勝)

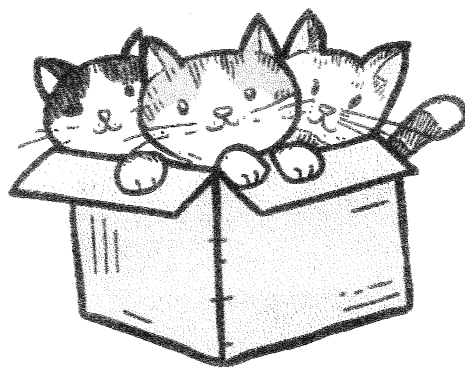


2006年6月23日「沖縄慰霊の日」から19年

今から19年前、新しいメンバーが増えたのである。彼女は、当時私が勤めていた八幡小学校の歩道橋の下に段ボールに入れられて捨てられていたのである。

猫好きの子どもたちがポスターを作り、飼い主を求めたが彼女は売れ残り、週末の6月23日、私が引き受けることになった。売れ残り組のあと2匹も、カマタさんとフジノさんの家にもらわれていった。

わが家へやって来た猫は娘が「ノンちゃん」と名付け、妻と2人はまさに「猫可愛がり」をし、気づけば我が家の中で一番の「地位」についていた。



ハチキン(土佐弁の男勝り)のノンは、ヘナチョコオス猫を追いかけて回し、自分の縄張りを狩り続けていた。しかし、ここ数年老いに勝てず、喉が痛いのか固いものが食べられず、スープ状の物しか受け付けなくなっていた。この冬、人間界はインフルエンザ流行で発熱するなど大変やったのに、彼女は夜中も「見回り」に出せと「ギャオーギャオー」叫んで、近所迷惑やった。

そんなハチキンもGWに入った頃から、水もエサもとらなくなり、雨が降るGW最終日に、天国に静かに旅立っていった。(他の兄弟姉妹たちは、今どうしているのか…?)

～ 2025年6月23日「沖縄慰霊の日」を前に… ～

(TK)

人権映画見て歩記

file 114



刑務所の近くにある「差入店」を知っていますか? 受刑者への面会や差入れには厳格なルールがあり、家族でも抵抗を示す人がたくさんいます。そんな人たちの便宜を図り、時には代理で差入れや面会をするのが差入店の仕事です。日本映画『金子 差入店』を紹介します。

金子真司は子どもの頃からネグレクトを受けており、カッとなったらブレーキが利かない人間です。それゆえ真司は傷害事件を起し懲役刑を受けた経験があります。当時は面会に来た妻に暴言を吐くような人間でしたが、出所を待ち続けた妻の優しさに、彼は人生をやり直す決意をします。出所後の仕事として、叔父が経営する差入店を選び、今もその仕事を続けています。

ある日、息子の幼馴染みの少女が惨殺死体で発見されます。悲しみに沈む家族を助けようと妻は葬儀の手伝いに行きますが、ママ友たちから「あなたのような仕事の人を手伝いに来るなんて不謹慎だ」と言われてしまいます。数日後、差入店にひとり女性がやってきます。それは少女を殺害した青年の母親でした。真司は動揺しながらも「誰もが面会や差入れをする権利がある」と支援を約束します。感謝して帰った母親でしたが、翌日から無理難題を言い始めます。我慢しながら青年の面会に行った真司は、そこで反省の素振りもなく「自分の犯罪は社会への復讐のためだ」と言い張る青年を目の当たりにし、耐えられなくなっていくます。さらに追い打ちをかける出来事が起きます。差入店をしていることを理由に、息子が学校でいじめられたのです。真司は職員室に怒鳴り込み、担任に暴力を振るうという騒動を起してしまいます。落ち込んだ真司は、駆けつけた美和子に「俺はもう自信がない。こんな仕事はやめる」と言います。そんな真司に向かって美和子は「あなたのやっている仕事は素晴らしい仕事だ。あなたは間違っていない。間違っているのは社会の方だ。なぜ自信が持てないの!？」と力強く諭すのでした。

連日のように弱者を狙った凶悪事件が報じられています。それに対する社会の眼差しや報道には犯人への怒りしか感じられません。そんな社会に抗うように受刑者の更生を信じ続ける真司一家の物語が、多くの観客の心に刺さることを祈るばかりです。

(見て書いた人…渡邊幸平)

*「イオンシネマへ行こう」でも紹介できたはずが、12日で上映終了とのこと。